

Ruhe (ルーエ やすらぎ)

Oktober 2015

34

The German House in Naruto

発行日 2015年10月30日
発行 鳴門市ドイツ館
編集 川上三郎
〒779-0225
鳴門市大麻町松字東山田55-2
TEL:088 689 0099 FAX:088 689 0909
URL: http://www.city.naruto.lg.jp/germanhouse/
e-mail: doitukan@city.naruto.lg.jp

前号でも触れましたが、今年度から新しい指定管理者に交代しました。そこで、挨拶かたがた、これからの方針・抱負などを書いていただきました。

鳴門市ドイツ館について (ごあいさつ)

指定管理者鳴門市うずしお観光協会
専務理事事務局長 白石 裕之

鳴門市ドイツ館の指定管理者を平成27年4月1日から鳴門市うずしお観光協会が受託いたしました。鳴門市賀川豊彦記念館と道の駅「第九の里」物産館を含め周辺三箇所の業務を観光協会が行うことになり、大麻（おおあさ）地区（鳴門市最西部）活性化のため大きな一歩となりました。

鳴門市ドイツ館はもとより大麻地区を平和と友好の地域として広く知らしめてゆくのドイツ館指定管理者鳴門市うずしお観光協会の使命であり、大きな目標です。

鳴門市民がドイツ館へ入館した回数が少なく、入ったことがない方もいるのは地元活性化のためにはマイナス要素です。広く県外や海外に広めるためには地元の方の口コミが大きな力となります。

今一つ、大きな課題は鳴門公園地区（鳴門市東北部、渦潮で有名なところ）に来られている年間百万人強の観光のお客様をいかにして大麻地区（鳴門市最西部）へ向わせるかの問題です。ほんの数パーセントのお客様が来られればドイツ館はもとより大麻地区（四国遍路の第1番札所霊山寺があります）の観光振興に大きな力となります。

ドイツ館の展示も数年間変わっていないため、少しずつですが手を加えています。観光客、鳴門市民、徳島県民が何度でも訪れられるよう展示変更も推進中です。

鳴門市ドイツ館で実施のイベントも今まで以上に充実させ、皆様楽しく訪問できる施設として運営してゆく予定です。合わせて休店していましたドイツ館ミュージアムショップも近々再開予定で、ドイツ民芸品、ドイツ館並びにドイツの書籍、ドイツ館所蔵品の複製品、ドイツ菓子など充実した品揃えで皆様にご提供できるよう準備中です。

お遍路から生まれた「お接待」の心で当時の板東の住民がド

イツ俘虜に接したようにドイツ館へご来館のお客様を暖かくお迎えしようと職員一同心がけています。

鳴門市ドイツ館は鳴門市とドイツの友好関係を今まで以上に強く保ち、世界へ向けて国際交流を推進すべく情報発信を強めます。

ドイツ館周辺には俘虜関連施設がたくさんあります。展示品の中には珍しいもの、俘虜が「日本に」残した遺産など来館して見られるものがたくさん展示してありますし、食に関しても多くの遺産があります。

平成三十年（2018年）にはドイツ人俘虜がベートーヴェン第九を鳴門の地で演奏したアジア初演から百周年を迎え、記念演奏会も鳴門市文化会館で予定されています。盛りだくさんの楽しい平和友好施設鳴門市ドイツ館へお越しください。

来館者について

今年も国内を始め、国外からも様々なお客様に鳴門市ドイツ館へお出でいただいておりますが、元俘虜収容所関係子孫の方も2組来館されました。その際、貴重な資料をいただきましたので、ご紹介します。

ドイツからは元捕虜ブルーノ・コルゼルトの孫、ライナー・ハルトマン夫妻とその娘のハイカ・ハンブルガーさんが4月初旬に来館されました。ちなみにハンブルガーさんは現在東京にお住いです。



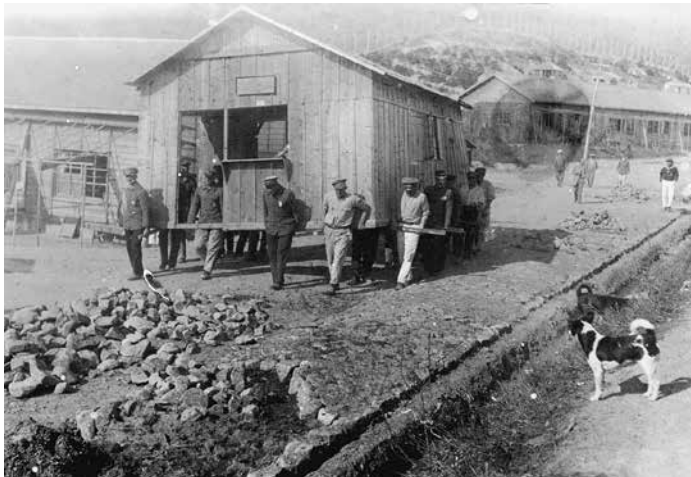
ハルトマンさんご一家とロバート（左端）

ご家族とは館長および国際交流員ロバート・テルシグがお目にかかり、写真などをみせていただきながら話を伺いました。その折に収容所時代の貴重な資料となる品を3点いただきましたが、それは後で紹介します。その後、ロバートに館内の案内と収容所跡地などの案内をしてもらいました。収容所跡地では祖父（および曾祖父）の居住していたのが、当時の兵舎のレンガ基礎がもっとも良く残存している第5棟だったので、感慨深いものがあったのではないのでしょうか。



「ゲーバ」のスタッフ、後列左から3人目がコルゼルト

さて、ブルーノ・コルゼルトは本国で菓子職人として修業後、青島で就職していて、第一次世界大戦勃発で応召、捕虜として徳島次いで板東収容所で暮していました。板東では経歴を生かし、収容所菓子店の「ゲーバ」で働いていました。頂いたもののうち一点はこの「ゲーバ」のアルバムです。実は以前からこのアルバムを複製したものはあったのですが、現品は初めてで、より詳細な写真の分析が可能となりました。一例をあげれば、小屋を移転する運搬作業中のたまたま写っていた道が丁度捕虜自身による舗装作業途中で、敷石の状態や排水路について検証する材料になります。



「ゲーバ」アルバム以外にはコルゼルト自身のアルバムと徳島時代の収容所新聞『トクシマ・アンツァイガー』第1巻をいただきました。アルバムに含まれる写真の点数は少ないのですが、初見のものも多く、貴重な資料であることに変わりはありません。『トクシマ・アンツァイガー』は以前、ドイツ、フレンスブルクのミュールヴィック海軍学校図書館収蔵のものを底本として電子文字化および翻訳作業に用いたので、内容については承知していました。しかしこれらはモノクロコピーでした。

今回、ガリ版で多色印刷するページなどを直接見ていると、それが後の板東の美しいガリ版印刷へと展開するきっかけとなったわけであり、捕虜たちの印刷技法の発展という点からも興味深いものでした。

5月に東京都に在住の野田義彦夫妻ほか2組の夫妻が来館されました。奥様方は3人姉妹で、板東俘虜収容所職員であった諏訪邦彦中尉（当時）の孫娘と自己紹介されました。保管されていた当時の写真などをお見せいただき、こちらも捕虜制作の収容所ガイドを元に歓談させていただきました。写真は当初スキャンをするつもりであったところが、急遽寄贈いただけることになり、びっくりしました。

写真の中には諏訪中尉の前任地であった香川県丸亀収容所時代のものと板東時代のものがあって、そのどちらも初見の写真が多くありました。また既知の写真でも、以前のものがカメラによる複製であったり印刷物であるため、今回はより詳細な点が出るようになるなど、いずれも資料的価値が高いものです。あらためてご好意に感謝を述べたいと思います。

写真中の1枚を紹介します。俘虜製作品展覧会会場を撮った写真は各種見てきましたが、これは初見です。注目は右のテントの上方には「俘虜製作品」という看板が付けられていることで、どうやら公会堂での製作品展示のほか、こちらでは直売コーナーもあったことが知られます。



収容所関係ではないのですが、京都にある関西日仏学院の生徒と先生方が来館、常設展示の見学をしました。この時、学院の館長で在京都フランス総領事館のシャルランリ・ブローネ総領事も来られていて、ドイツ館館長、ロバート・テルシグと懇談をしました。



神社境内で捕虜たちが行った仕事

鳴門市ドイツ館の近くに大麻比古神社という由緒ある神社があり、その境内は徳島県で随一の広さがあります。ここは板東俘虜収容所から1kmを超える程度の距離で、また境内の雰囲気も良いせいでしょうが、ドイツ兵捕虜たちが頻りに散歩に来た場所です。そしてここには彼らの建設したドイツ橋とめがね橋という石橋が今も残っています。

この2つの石橋を建設したそもその端緒は、当時の板東町(現在の鳴門市大麻町の一部)の人々から神社境内を流れる小川に木橋を架ける工事を捕虜に請負って欲しいとの要望があり、それにドイツ兵たちが応じて工事を始めたことにあります。

この木橋については、収容所新聞『ディ・バラック』9月号の記事中に挿絵が掲載されていて、どのような姿であったのかは知られていました。しかし、その具体的な位置については不明なままでした。今年、大麻比古神社からの依頼を受けた佐藤征弥徳島大学准教授と神社側との調査研究により、ほぼ確定できました。その際の決め手となったのは、ひとつは神社で古い境内地図が発見されたこと、もうひとつはこの春に私が入手した写真アルバムデータに建設中の木橋の写真が発見されたことです。地図からは今は存在しない道が書込まれていて、問題の橋へのアクセス道路と見なせることが判明し、写真からは現状と比較して、橋の位置が小川と別の川との合流点の少し上流側に判断できました。



木橋の架設作業をする捕虜たち

この調査研究はこの木橋だけでなく、捕虜がその後、本殿裏境内に作ったと述べている公園の姿がどうであったかを究めるためだったのですが、実際に彼らの作った道の遺構も発見されました。これまで境内では2つの石橋という点だけだったものが、もっと面的な広がりのある捕虜の遺産となり、意義深い成果が得られたと思います。従来の鳴門市での日独友好関係の発展のために寄与するものになるでしょう。

ところで、この写真アルバムは木橋以外にも従来知られてい

なかつた写真を多く含み、研究資料として非常に貴重なものです。地元のマスコミに大々的に取上げられましたが、ドイツ館が所蔵するものではなく、ドイツ在住の捕虜の子孫の方がお持ちになっています。

企画展示の予告

12月9日(水)から来年の1月24日(日)にかけて、ドイツ館で企画展示「ドイツと日本を結ぶものー一日独修好150年の歴史ー」が開催されます。主催は鳴門市ですが、展示内容の選択と展示方法に関しては館長が担当しますので、鳴門市(鳴門市ドイツ館)主催という表記にしています。

企画展示 「第九」アジア初演100周年記念イベント

ドイツと日本を結ぶもの

一日独修好150年の歴史

鳴門市ドイツ館 2階特別展示室および1階ホール
2015年12月9日[水]～2016年1月24日[日]

● 関連イベント イルミネーション設置!!

● ドイツ館周辺に 阿波大正浪漫 「ハルトの庭」開園

● 無料観光ボランティアガイド 地元ボランティアガイドと歩く 「第九」アジア初演の地「なると」

● ドキュメンタリー映画「敵が友になるときー徳島・板東収容所のドイツ人捕虜ー」2015年12月19日(土)終日上映

● ドキュメンタリー映画「板東俘虜収容所」2016年1月9日(土)終日上映

鳴門市ドイツ館 THE NARUTO GERMAN HOUSE

TEL: 088-684-1539 FAX: 088-683-0237

この企画展示は千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館(歴博)が中心館となって企画立案されたもので、歴博での展示後、長崎歴史文化博物館、鳴門市ドイツ館、横浜開港資料館と巡回します。巡回展ではあるのですが、それぞれ館の規模や展示設備、館のコンセプトとなる歴史的背景が異なるため、各館で展示内容がかなり違っています。ドイツ館では展示設備の関係上、現物およびレプリカの点数をかなり絞らざるを得ませんでした。それでも普段目にしないような史料(レプリカですが本物と遜色ないもの)が展示されますので、徳島県内はもちろんのこと、近県の方はぜひご来館、ご高覧いただきたいと存じます。

あと、鳴門独自企画のひとつとして、捕虜たちの残した写真をできるだけ多く展示する予定です。こちらもお楽しみいただけたらと思っています。

なお、歴博で編集・発行されたこの企画展示の図録がドイツ館でも発売されます。価格は2000円で、多彩な史料画像が掲載され、歴史に関心を持つ方には非常に興味深いものではないでしょうか。歴博では売切れだそうです。

この企画展示後、もうひとつ「寄贈・寄託品展」も開催予定です。日程は2月中旬から3月末頃までの予定、展示内容もまだ具体的には決定していません。

これまで、ドイツ館には数々の写真や写真アルバム、絵はがき、印刷資料、家具などが寄贈されたり、寄託を受けています。それらは常設展に展示されているものもありますが、収集されてから余り一般市民のお目にかけられる機会がなかったものもあります。ドイツ館所蔵品図録として公開はしていますが、今回できるだけ多く展示して寄贈・寄託していただいた方々の好意に応えたいと企画するものです。

収蔵品の貸出し

昨年はドイツ国内、ベルリンとトリアでの企画展示のためにドイツ館の所蔵品のうち印刷物を何点か貸出しましたが、今年は国内2館からの貸出し依頼がありました。

ひとつは群馬県の前橋文学館からで、ガリ版印刷に関する特別展示のために板東俘虜収容所での印刷物のうち、現物を10点、複製を4点貸出しました。幸い来館者には好評で、鳴門でしか見るのでできないものが群馬で現物を見られて感激なさった方もおられたとのことでした。

もうひとつは、上述の巡回展にからんで長崎歴史文化博物館からの依頼があり、板東俘虜収容所所長であった松江豊寿が若い頃着用していた肋骨服とベートーヴェン第九交響曲の演奏会パンフレットを貸出しています。肋骨服は写真のように最初に陸軍を指導したフランス軍にならったフランス式の制服で、後のドイツ式の制服とはかなり趣を異にするものです。

貸出しの際の立会点検のとき初めて詳しく見たのですが、百年以上前の服にかかわらず、あまり傷みもなく、松江家で大事

に保管されていたことを実感しました。ちなみにこのように傷みの少ない肋骨服は、全国的にも少数しか残存していないとのことです。



これまでの主な行事

4月5日	ラヌクルス公演
4月16～5月20日	ろうけつ染め展
5月3、4日	フリーリングスフェスト
5月26日～6月7日	「なると第九のあゆみ」展
6月13、14日	ドイツ館の鉄道会
6月13日～6月30日	鉄道写真展
7月4日	七夕コンサート
7月18日	ドイツ館で学ぼう！
8月1日～23日	ドイツの食文化展
8月2日	第九の里コンサート
8月22、23日	こどものおながく館
9月20、21日	ドイツグルメッセ
9月5日～23日	「ドイツ統一への道」展
10月11日	ドイチェスフェスト in なると



👁️ 編集後記

今回の原稿を書始めた段階で、4月前後にやり取りしたメールを参考にしようとしたところ、新しいメールシステムでは3ヵ月より以前のメールが自動で削除されていることが判明。昔のメールは8年以上前のものでも保存されていたので、重要なメールでも別途保存しておかなかったのが油断していたと言えればそれまでですが、見事に足下を拘われました。

(川上)



中央が肋骨服を着用した松江豊寿